

チェンマイ大学での貢献 (35)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

毎年新しい年を迎えると、大学のある研究室では必ず1月の後半に新年会を催すのが恒例の行事である。筆者はこれまでもそのほとんどに招待され、参加の機会を得てきた。本報ではこの「新年会」例会を紹介し大学（特に学部、学科、研究室レベル）の現状に筆者なりの意見を披露したい。

新年会は卒業・修了式が敢行される1月22～23日頃の少し以前に企画される。その主たる理由は卒業・修了生がその式典参加のために大学に戻ってくるということに起因する。筆者が見る限り参加者は上記の対象者のみならず、研究室の既卒業・修了生、いわゆる先輩であり、既婚者は家族も同伴で駆けつける。研究室の同窓生は横のつながりを強化し、先輩と後輩の関係は縦のつながりを拡張展開する機能をもつ。過去1年間の活動をまとめたビデオでの紹介にはじまり、研究室の学生の優れた業績への表彰と将来に向けたさらなる激励がそのプログラムの中核をなす。筆者の役割は「新年講話(New Year Talk)」と称して話題提供することである。内容は卒業・修了生への祝辞、新年会への招待に対する謝意に始まり、あるときは「人生訓」、またある時には「時の話題」に焦点を当てたものとなる。2017年のそれは1月19日の夕刻に催され、「New Year Talk」と題して20分ほどの講演資料を準備した。内容を以下に示す。演題は「大学は今、どのようなか、How the universities are now」である。アジアの大学はどうなっているか？まずは下表にアジアの主要な国の大学数を日本との比較で示す。

Table 1 アジア（タイ近隣）の主要国の大学の数

Name of Country	Number of University
Japan	756 (National 86, Public 77, Private 595)
Thailand	150
Vietnam	63
Laos	15
Myanmar	11
Cambodia	9

現在タイ政府が大学をどの様にしようとしているかを要約し紹介する。「大学の数を増やすべく如何に政策を進めているか」その一端を垣間見る事が出来る。

1) これまで職業訓練専門校の位置づけであったラチャパット校（教育教員養成校）、ラチャマンガラ（技術教員養成校）を4年生大学に格上げし、さらに修士課程、博士課程を設置する。

2) 既存の大学の特定の学部の特化した専門分野を拡充して新しい大学とする。

一方、既存の大学が生き残るための条件は日本と同じで1) 国際大学、2) 研究大学であることである。これらは特にチェンマイ大学のような「独立行政法人大学」にとってはタイ国内のみならずアジア、ひいては世界の先導的拠点大学としての存在が重要である。この政策は基本的に日本と同じと言えよう。したがってこれらの条件を満たす事が出来ない場合は大学の解体、改組、他大学との統合となる事も珍しくない。大阪外国語大学は大阪

大学の学部の一部として吸収統合された。研究大学という条件を注視すると、主に人文・教育など社会科学を中心とする大学は改組の対象になりやすい。タイの文部行政をかいつまんで結論づけると「大学の数を増し、既存の大学の拡充を進めると同時に、高等教育に基づく人材教育を通じて国力の強化を図る」と言うことができる。となると将来的に大学教員としての人材開発育成と相当の能力を有する人材供給が急務となる。高等教育推進に必要な学位保有者の需要が増す。就職、離職率とも勘案し高等教育に進む者への奨学金の供・貸与増大などの対応が必要となる。

●タイの大学ランキング

THAI & JAPANESE UNIVERSITY RANKING http://sabaijaicons.com/thai_education.html THE2010			
Rank	Thai University (world)	Rank	Japanese University (world)
1	KU (140)	1	Tokyo University (20)
2	CU (173)	2	Kyoto University (59)
3	MU (202)	3	Tokyo Institute of Technology (141) Kyushu University (153)
4	PSU (228)	4	Osaka University (157)
5	KKU (233)	5	Tohoku University (185)
6	CMU (236)	6	Nagoya University (226)
7	KMUTT (576)	7	Tokyo Metropolitan University (226)
8	TU (638)	8	Tokyo Medical & Dentistry University (276)
9	KMITL (677)	9	Tsukuba University (301)
10	Maharakam University (727)	10	Hokkaido University (351) Kyushu Institute of Technology (351)

Source: <https://www.timeshighereducation.co.uk/>

Fig.1 THE2010 によるタイと日本の大学ランキング

Quacquarelli Symonds Ltd. (QS)

- **Opened on July 13, 2015**
- **Quacquarelli Symonds Ltd. (QS) URL 1**
4 Thai Universities are ranked among 100 world top universities academic area
- **KU, CU, MU, CMU are highly evaluated based on their specific areas**
- **KU (39): Agriculture & Forestry, No.1 in this area**
- **CU: Chemical Engineering, Modern Language, Architecture & related Environment**
- **MU: Medicine**
- **CMU: Agriculture & Forestry**

Fig. 2 タイの4大学が世界のトップ100内に専門分野で入ったことをQSが発表(2015)

Fig. 1 は 2010 年のタイの大学ランキングを日本の大学のそれと併記して示す。この図においての順位はそれぞれの国でのランキングであり、同じレベルでのランキングを意味しない。筆者の在籍するチェンマイ大学は6位にランク付けされている。Fig. 2 はQSが2015年の大学ランキングの中で世界トップ100の中にタイの4大学が専門分野別の評価で含まれていることを公表した。すなわちカセサート大学(農学・林学)、チュラロンコン大学(化学工学、現代語学、建築および関連の環境学)、マヒドン大学(医学)、そしてチェンマイ大学(農学・林学)である。この資料はパーティ参加者にチェンマイ大学に対する社会的評価を知らしめるべく用意し喚起激励を促すべくプレゼンテーションしたものである。

●大学間国際交流プログラム

海外の大学との間で継続実施している交流事業において、自らの大学の立ち位置がどのような状態にあるかを常に検証する真摯な姿勢が必要であることは論を待たない。ここでは事業遂行における注意と警告の意味で敢えて恥ずかしさを超えて記述したい。筆者が在職時に三重大で立ち上げた3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムは昨年創立23年目を迎えた。事業の名称は「3大学」を維持しているが実質参加大学数はその2倍も3倍もある。2016年度も9大学が参加した。ホスト大学としての資格を有する大学も3大学(日本、タイ、中国)からインドネシアを加えた4大学になった。ホスト大学は歴史的に事業創設に合意、尽力した貢献度が評価となっているが、いつまでもその資格が自動的に維持継続するとは筆者は理解していない。やはりホスト大学としての誇り(Pride)や尊厳(Dignity)、それに見合う総合的能力(Performance)が備わっていることが条件となろう。しかし事業が長期継続化するうちにホスト役の順番は自動的に回ってくるものとする大学

も出てくる。これこそホスト大学としての「誇りと尊厳」を忘れた恥ずかしい例である。Fig. 3 は「3 大学」事業で高い評価を得た学生発表者が表彰を受けた人数を示す。参加学生を励ます意味で設けた表彰制度である。いうまでもなくこの人数が多い事が唯一の評価基準ではない。しかし「あの大学は良く頑張っている」という印象を参加者の多くが感じるのには至極自然である。ましてやホスト大学としての資格を有する大学が毎年決まって低空飛行に似た結果を見せつけていてはその資質を問われるのは時間の問題である。かつてホスト大学としての有資格大学の一つが、表彰者がゼロに近い状況に陥ったとき、事業実施ホスト当番校としては当惑し、「どうしたものか」と相談を受けたことがある。その後の対応はわかりかねるが、同様の事態がチェンマイ大学でも生じようとしている。しかも昨年のみならず一昨年も似た結果なのである。改善すべき事項は Fig. 4 に示してあるが、どこにその原因があるかは極めて明確である。事業担当者の事業に対する「無関心」である。開催の時期が迫って来たから応募アナウンスをし、締め切りが来たら選考し、短い期間で練習して参加にこぎ着ける、と言った対応では良好な成果は生まれない。にわか対応では「参加した」と言う以外の結果が出ないのははじめから明白である。事業担当者のみならず、参加している大学の代表者である学長や高位要職者にも恥ずかし目を強いることになる。「無関心」と言う意味は事業担当者の利益になればやるが、そうでなければやらないと言う意味で、結局「身勝手」ということである。本来やるべき義務を有する事業責任者のこうした態度は逆に事業推進の障害になる。せっきくの提案や協力もその責任者のところで全てが止まる。事業参加者選考も責任者という権限を利用して自分好みの「ペット的」学生を巧みに入れ込む。選考基準や他の情報も殆ど公開・シェアしない。

TRI-U 2016 AWARDED NUMBER OF STUDENTS			
University	Oral presentation	Poster session	Total
IPB	5	3	8
MU	2	3	5
JSU	4	0	4
MJU	1	2	3
SUT	1	0	1
CMU	0	1	1

※ Even for 2015, the result was the same as this, only one
No students from RUSSIA, BAU (Bangladesh), VSU (Philippines)
Only faculties attended

Fig. 3 参加大学表彰者一覧

Very much discouraged & ashamed by the result!

ISSUES FOR IMPROVEMENT

- "Call for Paper" Announcement
- Application Deadline
- Student Selection
- Quality of Research paper
- Presentation rehearsal / practice
- Evaluation Meeting / Party for cheering and encouraging after coming back toward the future

Where is the CMU's pride as the qualified host university member?

Fig. 4 改善に向けた自明の事項

学部長補佐などの要職に就けば「私が法律だ」と言う姿勢で、いわゆる「他を思いやるマインド」が全くないから全体が意気消沈し活力と希望が消える。その責任者を解任できるのは任命権者だけであるから、組織は凋落を待つのみとなる。任期後に責任者を変えても失った対外的信用はすぐには戻らない。国の内外を問わず、この部分に気がついていない任命権者がいかに多いことか。話は元に戻るが、そうした事業担当者にはおよそ「責任を取る」と言う姿勢も認識もない。ひょっとすると責任を取らねばならないと言う意識すらないのである。ましてや「事業を推進する」意欲も関心も微塵も見られない。なぜこうした事態が生じるか、それは任命権者と被任命権者の共通の利権以外の何物でもない。努力不足で不十分な成果を出したら責任を取るのには至極当然であるが。どこの世界でも、ましてや大学の小部門ですら人間の愚かな行為が機関と事業の進展を妨げている。

●新年会参加者への人生訓

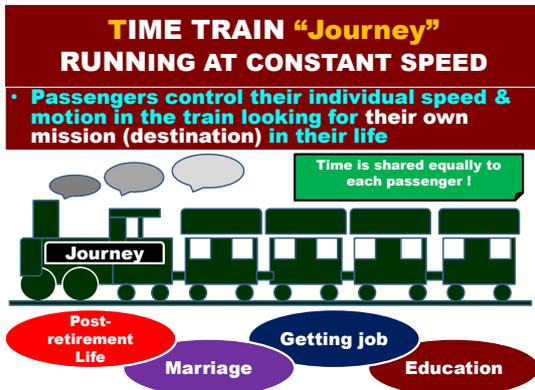


Fig. 5 タイム・トレイン Journey号

スピーチの最後は筆者が考える「生き方」講義である。人生の先輩として「如何に生きるか」をこれまでの経験を踏まえた一例として紹介するものである。Fig. 5はその理念（概念）を示す模式図である。“時間”という列車はどこ駅にも止まることなく（あるいは駅そのものがない）、また特定の目的地へのあてもなく一定の速度で動き続け、止まることはない。また往路のみで復路はない。乗客である人間は、世に生を受けることがこの列車への「乗車」であり、その死は「下車」を意味する。いつ乗車していつ下車するかは未知であり誰も知らない。中には自らの意思で下車する者（自殺者）もいるが、大半は天寿を全うする。一般に人生には3つほどの重要なイベントがある。卒業、就職、結婚であり、このイベントの時期や順番は個々に異なる。またその目的も個々に異なる。しかし、いつも誰彼の区別なく共有(Share)しているのが「時間」である。なぜ生まれ、なぜ生きているのかを考えると「ただ単に自己の人生を謳歌するだけではなく、「何かをすべきミッション(Mission)」を誰もが持っているのではないかと考えると、生まれてから現在までに受けた経験や、得た知識の量とレベルによって自分に出来ることがわかってくる。その小ささや未熟さに気づいて心機一転さらに努力すると言うのも良くある話である。定年退職し一職を終えるとあらためて自らのミッションを探し、見いだすことが重要となる。人間社会の一員として自分のためではなく人のため、社会のために何が出来るか、何をすべきかを考えるようになる。筆者は、人生とは「定速度で走り続ける共同列車に乗り、自らが目指す目的地(Mission)を探し続ける旅(Journey)と考えている。Journeyは目的地がない旅でありTripはたどり着く目的地が明確であるから両者は異なる。このような理念を早い段階からあらかじめ自覚しておけば経験を踏み、知識を得る機会への対応がより積極的となり「生を受けた意味」を明確なものにできるモチベーションのアップにつながる。ある人は定年後は在職時に受けたものをお返しする時期であるとも言っている。受けた恩義に謝意を持ってお返しをするのが定年後の第2の人生であると位置づける人も居る。